

今月7日午前10時半。

丸井織物本社の社長室に宮本徹社長と宮本好雄常務、生産、品質管理、営業などの各部門長8人が顔をそろえた。全員が立ったまま輪になり、資料を手手に報告を始める。短時間で情報を共有し、決断、実行を早めるための「立ちミーティング」である。

緊張感持って

ミーティングは週1回。前週のプロダクション報告から今週の計画、客先でのスケジュール、将来の大きな投資計画まで内容は濃密だ。宮本社長は「スピードと徹底の実行機関」と位置付ける。

「だから」と話しているより、緊張感を持ってはばっと決めた方がいい。立ちミーティングを始めてから、問題が解決しないまま放置されることはなくなった。

そもそも、社長室には宮本社長のデスク外にはソファなどは置かれていない。目に付くのは壁にはびっしりと貼られた紙。「誰、いつ新聞」と呼ばれるもので、立ちミーティングで決まらなかったことを書き込む決まりになっている。

宮本好雄常務は「世界に打って出るには、さら

挑

「立ち会議」で即断即決

女性初の技術職として生産現場で働く叶田さん。丸井織物が進める次世代人材育成の象徴だ
—石川県中能登町の宮米織物



に積極性や自律性が問われる。2次を見据える。果たと委託加工をこなしてきた「受け身」体質からの脱却を自指し、次世代を支える人材の育成が急ピッチで進む。

世界で勝つために

その一人が叶田さん。昨年入社したばかりで、女性初の技術職としてグループ会社の宮米織物（石川県中能登町の工場）でエアージェットルームを任されている。「やりたかったことを仕事にできてうれし

い。これまでは男性だけだった現場で汗を流す。

金大機械工学類で学び「機械をいじる仕事が好きだった」という叶田さん。数年前に女性の大半採用を始めた丸井織物を就職活動で知り、迷わず

就職したという。宮本社長は「自分の個性を生かせる仕事で、力を発揮してもらいたい」と、適材適所を自指し、各部門で女性の登用も進めるという。

他力本頼なままではこ

れからのグローバル競争は勝ち抜けないと言っら、その弱点を克服するのみ。確かな技術と品質を自信に、丸井織物の進むべき道は一つだ。（この項は藤澤瑛子氏が担当しました）

取材メモ

宮米織物 1937年、石川県鹿野島町（現在の中能登町）徳前に宮米機業場として創業した丸井織物の源流。社名は初代社長で石川県議だった宮本米吉氏から。